

## 書 評

Julia M. Wright, *Ireland, India and Nationalism in  
Nineteenth-Century Literature*  
(Cambridge: Cambridge UP, 2007)

加 藤 匠

アイルランドを大英帝国のなかに位置づけるとすれば、いかなる形が可能であろうか。インドをはじめとする大英帝国の植民地と比較することで見えてくるのは、植民地としてのアイルランドのもつ独特の位置である。ヨーロッパに位置しながら植民地であること、カトリック信者を多く抱え、キリスト教文化圏に位置していること、従順ではないとされながらも大英帝国に兵士や行政官を他の植民地以上に供給していたことなど、主権を奪われ、イングランド支配下にあるという意味では他の植民地と共通項を持ちながら、言語や文化といった点ではむしろイングランドに近い——換言するならば、「植民地的擬態」の枠組を適用できない——植民地がアイルランドなのである。2004年にケヴィン・ケニーが編集した『アイルランドと大英帝国』が、オックスフォード大学出版局の大英帝国史のコンパニオンシリーズ中の一巻として刊行されたように、アイルランドの位置づけが近年注目されつつある領域なのは確かだろう。

アイルランド文学のアンソロジーの編纂やウェブ上で展開されている十九世紀アイルランド文学の文献目録でも知られるジュリア・M・ライトが本書の主題としたのが、従来の研究では軽視されがちであった〈植民地の作家たちが他の植民地をいかに表象したか〉という、非常に興味深い問いであった。彼女の言葉を借りるならば、「アイルランドについて書かれたアイルランドの作品だけでなく、インドについて書かれたアイルランドの作品やアイルランドやインドについて書かれたイギリスの作品についても検証することは……イギリスとアイルランドの文学の間にある複雑な伝統を三つの角度から考え

るうえで役に立つ」(2)ということになる。〈イギリス—アイルランド—インド〉という三項を取り巻く言説がいかに展開されたのかについて、マライア・エッジワース、シドニー・モーガン、マシュー・ルイス、チャールズ・マチューリン、オスカー・ワイルド、ブラム・ストーカーといった小説家から、トマス・ムーア、デニス・フローレンス・マッカーシーといった詩人、そして聖職者であり詩人でもあったウィリアム・ハミルトン・ドラモンド、新聞社の経営者であり、その回想録でも知られるチャールズ・ハミルトン・ティーリングといった、1800年のアイルランド連合法以降に活躍した多彩な人々の言説を通じて論じたのが本書である。その意味では、学際的な論文の刊行に力を入れる、ケンブリッジ大学出版局「十九世紀文学、文化研究シリーズ」に相応しい一冊だと言えるだろう。

本書は二部構成となっている。第一部「国家をめぐる感情、植民地的擬態、そして共感による解決」では、文化や人種といった表面的な差異は共感を基盤とした社会の調和が生まれることで超越しようとした〈センチメントを軸とした文学〉が扱われ、第二部「植民地を舞台としたゴシック小説と富の循環」ではゴシック小説が主に扱われている。ライトが本書の軸としたのは、帝国主義のヘゲモニーを脅かし、文化を超えた一体感を人々に感じさせることができる「感性」(‘sensibility’)であった。啓蒙主義を背景とする「感性」は、特に他者の痛みや強い感情に対して共感することを指し、倫理的に正しい社会の礎となるだけでなく、様々な差異を超えた連帯を作り出すものと考えられていたものである。

アイルランドで展開されていた感性をめぐる言説については三つの側面から論じられることになるのだが、ライトがまず注目するのがナショナリズムとの結びつきである。彼女は当時のアイルランドにおけるナショナリズムを、過去を理想化し、そこへの回帰を志向する一派と、過去の文化的遺産を否定し、イギリス式のやり方を導入することで新たな道を模索すべきであるとする一派とに分類する。しかし1798年反乱について書かれたティーリングの回想録に見られるのは、こうしたナショナリズムとは異なる「センチメンタル・ナショナリズム」と呼ぶべきものであるとライトは指摘する。これはセンチメントや主権といった啓蒙期の言説に依拠しながら、宗教、言語、階級やセクトを超え、虐げられた人々に対する共感によって結び付けられた包括

的な国家を志向するものだと彼女は言う。こうした試みが、国民に対する共感を欠く体制が問題であることを読者に認識させる機能を持っていたとする解釈は、アダム・スミスをはじめとする当時のコンテキストが提示されることによって、非常に説得力あるものとなっている。第一章の題名にあるように、まさに「不感症の帝国」に問題があるのだ。

この「センチメンタル・ナショナリズム」に対する対照的な反応を代表するものとされるのが、モーガンの書簡体小説『野性的なアイルランドの少女』とエッジワースの『アンニュイ』や「びっこのジャーヴァス」である。前者においては、アイルランドにやってきた不在地主の息子であるホレイショ・モーティマーが、現地の女性グロルヴィーナとその周辺の人々とのかかわりを通じて自らの偏見を捨て去り、アイルランドの文化や歴史についての理解を深めるといふ、「植民地的擬態」の流れを逆転させるような変化を遂げる。ホレイショの変化をもたらすのはアイルランドに対する共感であり、彼がアイルランドの土地の管理を任せられ、グロルヴィーナと結婚した後も、その姿勢が揺らぐことはない。一方、エッジワースがアイルランドやインドといった植民地を描く際には、植民地の人々は感性や共感ではなく、より発達したイギリス式のやり方を学習して模倣すべきであるという姿勢をとった。『アンニュイ』や「びっこのジャーヴァス」において描かれたインドの支配者たちが、イギリス式のやり方を導入することでその権力を持続させるというプロットは、彼女のそうした姿勢を端的に表わしている。

第二に、ライトは感性を宗教的寛容と結び付ける。ライトがここで注目するのはアイルランドの宗教問題を直接扱った作品ではなく、インドを舞台として改宗について取り上げた作品である。ムーアは『ララ・ルーク』で、宗教のミッション以上に政治的思惑が絡むものとして改宗を否定し、そうした政治と宗教とが一体となった改宗は偽善であると説いた。モーガンは『宣教師』で、宗教的寛容や信教の自由を理想化して描く一方で、宗教的な不寛容や改宗を批判する。ムーアやモーガンが宗教的寛容と倫理に基づく統治には感性や共感が不可欠なものとし、不寛容な姿勢は支配者側の感性や共感の欠如を象徴するとしたのとは対照的に、ドラモンドは感性ではなく理性の意義を強調し、ラジャの改宗を好意的に描いたとされるのだ。

第三に、ライトは感性が物語における歴史観とも密接な関係を持つと指摘

する。感性を強調する作家たちの特徴は、エッジワース的な〈帝国が進歩をもたらす〉という見解やホイッグ史観を否定し、統治側の鈍感な対応が植民地の人々の発展を妨げ、略奪と暴力の反復をもたらすことにあるとされるのだ。モーガンは「不在地主」を通じて、アイルランドの植民地化は、アイルランドが本来辿るはずだった発展から逸脱させるものであり、不在地主制度を人々の共感を欠いたイギリス支配の象徴として批判し、青年アイルランド運動に深く関わったマッカーシーは、「アフガニスタン」という詩を通じて、元来は楽天的であったアフガニスタンが暴力の連鎖に捕らわれ、その反復から逃れられない状況を描写する。アイルランドの作家達が表象した植民地の歴史に、ゴシック小説の形式である〈断片と反復〉を読み込む第五章も興味深い論考が展開されていると言えよう。

本書においては、ナショナリズム、宗教的寛容、歴史観といった、十九世紀アイルランドで重要な意味を持っていた事象のなかで感性が果たしていた機能については、説得力のある形で論じられている。当時のアイルランド作家たちの認識のあり方を概観する上で有益なものであり、アイルランドを専門としていない研究者にも興味深いものであろう。こうしたコンテクストを共有していた、本書では触れられていない作家と比較することで新たなものが見えてくる可能性もあるはずである。

だが本書の第二部において、ルイスの「アナコンダ」やマチューリンの『放浪者メルモス』、『ドリアン・グレイの肖像』といった、「インドについて書かれたアイルランドの作品やアイルランドやインドについて書かれたイギリスの作品」をライトが論じるようになると、首を傾げたいくなるような箇所が多くなってしまふ。最大の問題は、あくまでも作品内部の表象に軸足を置き、〈イギリス—アイルランド—インド〉という本書の軸となる三者関係を作品の読みに強引に反映させるような作品分析を展開したことだろう。『アイルランドと大英帝国』所収の論文でクレイルカンパがいきみじくも指摘したように、「十九世紀のアイルランド小説は、政治とは無関係の美学になることに抵抗した」(154)以上、時代のコンテクストを軽視したライトの作品分析には疑問を持たざるを得ない。

例えば「アナコンダ」においては、‘Anne O’Conner’ という名の女性が、アイルランドの換喩として機能するとされるのだが、彼女は実在する人物では

ない。彼女は、主人公エヴァラード・ブルックの婚約者ジェシーの伯母にあたるミルマンという人物が、‘anaconda’を誤聞して作り出した想像上の産物なのだ。しかも肝心なオコナーとアイルランドの関係も、ミルマンが「かつてオコナーというアイルランド人将校を知っていた」と言うのみで、その繋がりには甚だ薄弱なものに過ぎない。そのオコナーが〈帝国主義の犠牲者〉であるなどという解釈は、到底容認できるものではないだろう。『ドリアン・グレイの肖像』においても、同様の傾向が見られる。作品に明確に描かれていないインドを作品解釈に取り入れるために、ライトはウエストエンドに住む上流階級の人々が収集した様々なものにオリент——ここではインドだけではなく、オリент全般に範囲が拡大されている——を読み込む。そして、彼らの多彩な収集品はロンドンの墮落を象徴しており、作品の中心はドリアンが耽る悪徳ではなく、大英帝国を背景とした彼らの強欲であるとする読みは首肯しうるものだろうか。また、結論で提示される『キム』解釈にも疑義を抱かざるを得ない。イギリス人としても、インド人としても通用する少年とされるキムがアイルランド人の両親をもつと設定されているだけで、本書が論じてきた〈インドを描くアイルランド文学の伝統〉を『キム』が踏まえていると、わずか六頁ほどの論証で結論付けることなど到底できはしない。第六章の副題「全ては東を指し示す」が象徴しているように、説得力を欠く、はじめに結論ありきの論考と言えるのではないだろうか。

そうした不満があることは確かであり、ライトがここで提示した枠組として万能なものとは言い難い。例えば彼女が取り上げなかった人物——例えば、アイルランド出身でイギリスに渡り、クリミア戦争やセポイ反乱の従軍報道で活躍したウィリアム・ハワード・ラッセルのような人物——の場合、たとえセポイ反乱に対するイギリス側の報復に激しく憤ることがあったとしても、それとアイルランドの状況とを結び付けようとする発想が露骨に表面化することはない。したがって、彼を〈イギリス—アイルランド—インド〉という枠組にそのままはめ込むことは難しいだろう。だが、たとえそのような問題があったとしても、本書の読者には、彼女の指摘をひとつの基準として、それを検証するという楽しみが残されることになるはずである。